

「ダイ君・・・もっと来て。そうもっと強く・・・激しく・・・」
「はあ・・・はあ最高だよ。しょうちゃん・・・」

夜。終電が終わった深夜のラブホテル。
そこの最上階で二人の男女がくんずほぐれつ、性行為をしていた。
二人は付き合い始めてはや五年。
大学を卒業し社会人になってもう数年も経っている。
自立した大人へと成長した二人は、貯蓄も増え、資金に余裕ができ始めていたことから、結婚を意識し始めた。
だが、二人はまだ二十代半。
結婚するにはまだ早すぎると、親を始め会社の上司までも、みんな彼らの結婚に反対していた。
結婚するにしても、あと数年待ってからすればよい。それが世間家族、会社の評価であった。
しかし、それはできない相談だ。
二人は愛し合っており、今すぐにも結婚したい。結婚して子供を作り、家族を増やしたいと、そう強く願っている。
だから、二人毎日暇を見つけてはエッチなことばかりして、子作りに励んでいた。
こんなことを毎日し続けたら、いずれ子供ができるかもしれない。
いや、できた方がいい。そうなったら、いやでも結婚するほかない。
いわゆる、できちゃった婚ってやつだ。
そうなることを望んで、毎日毎日、飽きもせず性行為に勤しみ、二人は結婚できる口実を密かに狙っていたのだった。

「はあ・・・はあ・・・可愛いよ。しょうちゃん・・・」
「はあ・・・はあ・・・ううん・・・ううん・・・ダイ君こそ・・・カッコイイよ」

二人は自他認めるイケメン美女のカップルで、出会いは大学時代のバイト先。
カラオケ店のバイトで偶然二人は知り合い、そこから二人はすぐに惹かれ合ってしまった。

ダイ君と呼ばれている男は、この地区有数の名門校に進学するほどの秀才で、大学卒業後は大手金融機関に就職。
そこでも彼は持ち前の頭脳を存分に発揮し、
難しいとされる仕事も嫌な顔せず引き受け、最後までやり抜き通す根性が彼にはあった。
頭もいいが根性もある。そしてなにより交渉相手を納得させる。巧みな話術が彼にはあったのだ。
会社始めて以来の天才。
そう呼ばれるほど会社での評判はよく、将来を有望視された若手エリート社員に気づけなくなっていった。
そんな彼の趣味は山登り。
会社が休みの日は山に登って体を鍛えている。勉強だけでなく運動もできる文武両道の秀才。
まさにモテるために生まれてきたような完璧な男だった。

そのダイ君の相手を務めるのがこの女の子、しょうちゃんだ。
彼女はいわゆるお嬢様学校に通っている金持ちの娘で、県有数の大病院で働く医者の娘として生を受けた。
学校の成績もよく容姿端麗よし。そして人の痛みを分かり合える、心の優しい女の子であった。
大学卒業後は、大手銀行のテラーとして働き、お客様を一人一人丁寧に扱う、その彼女の働きぶりは銀行でも評判になっている。

「ダイ君ごめんね。こんな遅くまで突き合わせちゃって・・・」
「ああ、いいよ。いいよ。俺だって早く、しょうちゃんと結婚したいし、こういうのずっとあこがれていたんだ。もう最高だったよ」
「ありがとう・・・でも、臭くなかった？ やっぱりシャワー浴びた方がよかったんじ

や？」

「いいや。臭くない。臭くない。むしろすんげえいい匂いだった。もう最高だったよ。それよりしょうちゃん。体の方は大丈夫？」

「うん。ちょっとズキズキするけど、またしばらくしたら、すぐに良くなると思うから、平気」

「ごめんな。俺ちょっと強くやり過ぎたわ。次から気を付ける」

「ううん。そんなんじゃないの。むしろあのぐらいでいいよ。その方がダイ君も気持ちいだろうし」

「そっか。ありがとう。じゃあ、俺帰るわ。明日も仕事で朝早いし」

「うん。ありがとう。バイバイ、ダイちゃん」

二人はホテルの入り口で別れ、それぞれ去っていった。

それから数日後。事件は起こる。

「おい。起きろ」

聞き覚えの無い声だ。

だが、眠気の方が勝っていたので、そのまま眠る。

「おい。起きろ！ 13番」

13番。

その聞きなれない単語に、反応してダイ君は目を覚ます。

「うわ。イカの怪物！」

目を覚まし起き上がってみると、そこには見たこともないイカの怪物が立っていた。

脚が8本もある、人間サイズのイカ。

紫、赤、青、黄色、様々な色をしたイカがダイ君を囲むように立っている。

「4本目の脚がまだ固まっていない、今ははおとなしくしておけ」

「四本目の脚？」

視線を下げてみると、イカの脚がゴロンと寝転がっている。

「え？ イカ・・・違う。俺の脚だ・・・」

イカの脚が自分の意思で動き始めていた。てか気持ち悪い動き。

「俺の体になにをした？」

「ふふ。気になるか？ いいだろう。教えてやる。お前は今日から、デテール星人になったのだ」

「デテール星人？」

「そうだ。信じられないだろうが、お前は既にクイーンに殺されている。しかし、お前はクイーンに認められた、唯一のカブリアン人。

あのクイーンに唯一心を許された貴重なカブリアン人というわけだ。このまま死なすのはもったいない。

だから我々は一度死んだお前をデテール星人として蘇らせ、サンプルとして捕獲した。

そう話せば理解できるかな？」

「は・・・はあ？ クイーン？ カブリアン人？ デテール星人？」

聞いたことない、単語にダイ君は混乱をする。

しかし、それも無理はないこと。

さっきまで人間だった、彼がいきなりイカ型の宇宙人に改造され、自分の肉体が既に死ん

だと。そう言われているのだ。
そんなことを言われて、混乱しないほうが、おかしいくらいだ。

「カブリアン人は我々の言語だ。キミたちの言語では確かそれをチキュー人という。デテール星とは我々の母星のこと。そしてクイーンとは・・・」

ピーピーピー！！

緊急警報発令。緊急警報発令。クイーンが迫っています。

「ふふ。13号よ。ついにクイーンが戻ってきたぞ」
「だから、クイーンってなんなんだよ！ それにこの警報はなんなんだ！」

ダイ君はやかましい騒音に思わずイカ耳を抑えた。
真っ赤に光るランプ。そんなものが数えられないくらい、グルグルと周り、照明も赤い色へと変わっている。

「ふふ。クイーンとはなんなのか、そのイカ目で確かめてみるがよい」

ダイ君は、体を滑らせながら窓に近づき、それを覗く。

「なんだ。これ・・・」

見覚えのあるドアにダイ君は首をひね・・・もといイカの首と思われるところを捻る。
女の子らしい、ピンクのデコレーション。
床に置かれたのは白いクッションに、その横にある赤いベッド。
壁にはネコの絵が描かれたキャラクターかけられてある。

「しょうちゃんの部屋じゃないか？」
「そうだ。お前の生殖相手こそクイーンなのだ」
「クイーンってお前！ しょうちゃんのことだったのか？ おいお前ふざけんなよ。俺のことは悪く言ってもいいが、しょうちゃんのことを悪くいう奴は許せねえ！！」
「おいおい。ちょっと待てよ。お前が愛するクイーンは・・・おっと・・・もうそこまで来ているぞ！ クイーンがな・・・」
「クイーンって・・・」

ズウウウウウウ！！

経験したことのないような揺れが襲ってくる。
一回、二回、三回と揺れはリズムカルに揺れ動き、一定の感覚を保ちながら揺れていた。
自然の地震とは異なる揺れが、ダイ君の体を揺さぶる。

ギィィィ

手入れのしていない古扉のような鈍い音が鳴り響いた。

ポオオオオオオオオオ！！

「うわ・・・なんだ・・・」

ドアの開く音の後に響いたのは、恐ろしい怪物のような声だった。
それはゾウか、ライオンか、はたまたカバか？
猛獣の雄たけびのような、声にダイ君はイカ耳を塞いだ。
だが、それも、しょうちゃんがちょっとつぶやいた声に過ぎない。

「これが雌のカブリアン人、クイーンと呼ばれている最強のカブリアン人だ。
しかし・・・何度見てもおぞましい姿だ。見ろ！ ギョロっとした目玉が二つ、そして分厚い肉で囲まれた口が一つ。

そして毛の生えまくった、気味の悪い空気取り入れ口が二つ。どれもこれも形が不揃いで気味が悪い。お前もそう思うだろう？ 13号」
「なに言ってんだ。お前！ あれはしょうちゃんだぞ。俺と未来を誓い合った婚約者。なにが気味悪いもんか？」
「ガハハハッ！ そうか？ だったら、もう一回クイーンの姿をもう一回見てみる！ ほんとうにあれがお前の婚約者か？」

一匹のイカが人間であるしょうちゃんを見つめる。
その姿は小さく、人間のしょうちゃんから見れば、埃のように小さかった。
一方、細菌のような小ささのイカ星人。
デテール人に改造されたダイ君の目には、恐ろしい怪物が目に映っていた。
毛むくじゃらの、顔を持った怪物。
顔の上半分が毛で覆われている。

「なんだと・・・」

針金のような硬い毛がうっそうと生い茂っていた。
その下には、ぎょろっとした大きく見開いた目玉。その内部には血走っていた血管が浮き出していた。
目の下には、脂で汚れた醜い姿の鼻が、立っており、その奥には気味の悪い鼻の毛が所狭しと生い茂っている。
しょうちゃんは・・・いやその毛むくじゃらの生き物は、悪夢に出てくるような気味の悪い生き物だった。
いや生き物と呼んでいいのか、わからないぐらい気色の悪い生物。ダイ君の目にはそう映っている。

「昔のお前も、あんな不気味な姿をしていたが、よかったな。今ではすっかりイケメンになった。これも俺のおかげか。ガハハハッ！！」

鏡に映るイカ星人。
人間からみれば無残なイカ顔も、改造されたダイ君にはイケメンに見えている。
毛の生えていないツルツルの顔。磨けば反射しそうなほど綺麗な光沢を放っている。
そしてこのグネグネした骨のない脚こそ、かっこいい証。ダイ君はそう思い始めている。

「だが喜んでばかりもいられないぞ。あのクイーンの腹の中には子がいる。
カブリアン人の医学では初期段階過ぎて、わからないだろうが確実だ。クイーンは近いうちに子を出産する。それが誰の子かわかるか？」

それは言うまでもなく、ダイ君の子供である。
しょうちゃんとの間に出来た子供。できちゃった婚を望んでいたダイ君にとっては朗報であった。しかし、

「き・・・気色悪い・・・」

カブリアン人の子供が生まれるだって？ そんなの・・・。

「君が悪くて吐き気がする」

それはデテール人になった、ダイ君の今の考えであった。

「質の悪いことにクイーンの中に居る子供は、お前がカブリアン人（地球人）だったころの死体を喰って生きているんだ。
カブリアン人のクイーンは、好きになった雄の肉体を縮小化。吸収して子を作るという特性が古くからある。
まさにクイーンとは魔女のような生き物。まあそれを知っているカブリアン人は一人もないし、クイーン本人も気づいてない。
腹の中で愛する人が死んでいるっていうのに、なにも知らずに生きていけるなんて、まったく質の悪い生き物だよ。クイーンって奴は」

その言葉を聞いて、ダイ君は絶望した。
まさか愛する人が魔女であり、クイーンと呼ばれる存在だったんで。
だが、それもすぐに納得する。
今のしょうちゃんは、二足で歩く怪物。鼻の中に毛の生えた、気味の悪い化け物だ。
それに対し、デテール人である自分は綺麗な脚を何本も持つことができて幸せだ。
それに歩く時も、人間のように足を地面に叩きつけるのではなく、くねくねと、脚を滑らすように歩いている。
こっちの方がスマートだ。ズシズシと、二本の脚で歩く方がおかしい。人間とは野蛮的な種族である。

「そんなに暗い顔するな。俺がデテール人に改造しなければ、お前はとっくの昔に死んでいた。だから次はクイーンに復讐してやれ。それがお前にできることだ」
「わかったよ。俺あの怪物を殺してみせる」

愛する人を殺すとダイ君は迷いなく、そう答えた。

「そうと決まれば、話は早い。これはクイーンに関する極秘資料だ」

全長1560キロ
重量40兆トン

主食魚肉

「あの怪物。こんなデカいのか・・・」
「そうだ。だが驚くところはそこじゃないぞ」

デテール人は主食のところを指さす。

「肉や魚・・・あの怪物。死体の肉を食って生きているのか!？」
「そうだ。カブリアン人は血も涙もない残虐な生物だ。奴らは自分以外の他の生物を殺めて、その死体を食って生きている。たっく・・・呆れるぐらい野蛮な生物だよ」

ダイ君は元人間であるにも関わらず驚いた、
デテール人は空気を吸えば生きていける。人間とは違う、万能生物なのに、カブリアン人はなんて遅れているのだろう。
デテール人になりきった、ダイ君はそう思った。

「しかも大陸を踏みつぶす大生物ときた。これは手ごわい。だがな13号。安心するがいい。今から艦隊がクイーンに攻撃を仕掛ける」
「クイーンに攻撃を！」

ダイ君は、目を輝かせながらそう言った。

「そうだ。ここでクイーンを葬ることができれば、クイーンはもちろん、その子孫も葬ることができる。まさに一石二鳥。一撃で二人殺せるんだ」
「いつだ？ いつ。その艦隊がくる？」
「もうすぐだそうだ。いや・・・もう来たぞ！」

ワームホーがしょうちゃんの部屋の内部で展開された。
全長1キロにも及ぶ、巨大な大穴。そこに数千の艦隊が終結する。

「驚くなよ。カブリアン人が作った水爆なんか比じゃないぐらいすごい火力だぜ」

デテール人の科学力は進んでいる。

同じ大きさなら、地球人の水爆くらい屁でもない。
人知を超えた超兵器が数千
数千の大艦隊がしょうちゃんの部屋に集結していた。
そしてレーザーが発射する。
その数は約数千。数千のレーザーが、しょうちゃんの背後へと迫っていた。

「むふうふうふう！？」

何かの気配を感じ、思わず振り向くしょうちゃん。
彼女は軍艦の存在に気づいていた。

「え？ コバエ。いやあ。あっちいけ」

手を振り息を吹きかけるしょうちゃん。
虫を追い払う、何気ない女の子の仕草。
その声がイカ星人。デテール人にはこう聞こえる。

「ニチャアアアアアアアアアアア！！」

しょうちゃんの口がゆっくりと開く
糸を引きながら開かれていく女の口から、地獄の唸り声が響く。

「エエエエエ？ コオオオオバアアアエエエエ？？ イヤアアアアアアア！！」

しょうちゃんの叫びは合成された音声のように低く、ゆっくりと間延びした怪獣の声のよ
うな音が部屋中を震わせた。
その直撃を受けたのは、攻撃した軍艦群である。
軍艦たちは、しょうちゃんが吐く息をまともに受けてしまった。

「おいおい。あの怪物。口から火を噴いているぞ」

ダイ君の目に、火を噴くしょうちゃんの姿が目に映る。
人間にとっては、なんともない微かな吐息も、デテール人には炎のように熱く感じてい
た。

「クイーンもそうだが、カブリアン人は死んだ肉を捕食し、それを熱に変えて生きてい
る。我々デテール人では考えられないことだな」

しょうちゃんは、ゴ×ラのように口から熱線を吐き出し、次々と軍艦を撃墜してく。
その姿は、もはや愛する彼女の姿ではない。
恐るべき怪獣を見るような目で、ダイ君はしょうちゃんのことを見ていた。

「やばい毒ガスが来るぞ、早く逃げろ」

デテール人は、ポケットから宇宙船を取り出した。
四×元ポケットのような、収納のよさにダイ君は目を丸くしながら驚き、促されるまま宇
宙船に飛び乗った。

「はあ・・・息を止めてから、なんとか助かったか。で？ 13号お前は無事か？」
「うえええええええええ！！」

ダイ君は、ゲロを吐いていた

「たっく・・・息を止めてないからそうなるんだ。ほらよ。毒消しで匂いを消しな」

ダイ君の周りにクイーンの匂いがぷうんと漂う。
人間にとっては、なんともない微かな吐息の香り。
しかし、敏感なデテール人には、命にかかわる毒ガスとして認識されている。

「クイーンを始め、カブリアン人は死んだ肉を食って生きているからな。体臭だって当然臭いし、奴らの吐く息は気を失うほど匂うんだ」

クイーンの体から、猛烈な悪臭が立ち込めていた。その匂いは猛獣の体臭の比ではなく、猛毒ガスとして漂っている。死んだ肉を食べば、こんな匂いがする。ダイ君は身をもって、そのことを実感したのである。

「ヤバいな。さっきのクイーンの炎で500隻。半分近い船がやられてしまったぞ」

「コバエ」とクイーンが喋っただけで、500隻の船が煙を吐いて落ちていた。彼女は手は出していない。口から息を吹いただけで、水爆以上の火力を持つ軍艦に勝ったのである。

「うわあ。半壊した軍艦は悲惨だな。見ろ。クイーンの足元を」
「うえ・・・」

ダイ君は、思わず目を背けた。それもそのはず。しょうちゃんの素足が映ったからである。しょうちゃんの足は汗ばんでおり、ものすごい悪臭を放っていた。これはデテール人ならではの敏感さが仇となったのだが、しょうちゃん自身、先ほどのSEXで少し汗ばんでいたようである。

「助けてくれええええええええ！！」
「やめろ。やめてくれええええ！！」
「臭すぎるううううううう！！」

穴の開いた軍艦に立ち込める、しょうちゃんの足の匂い。戦いに負けた、兵士たちは、しょうちゃんの足の匂いに、殺されていた。汗ばんだ匂い、そして酸っぱい匂いは、デテール人にとっては猛毒だったのである。しょうちゃんが誇る、可愛らしい五本の指。その親指と人差し指の間に軍艦は落ちていた。足の中で一番臭いのが親指との隙間、そこに落ちてしまえば、もう助からない。軍艦は、しょうちゃんの匂いに侵食され黄色く変色している。変色し、鉄にひずみを生むほどの悪臭があったのだ。悪臭により、パツリと割れた軍艦の内部に、ぷーんと汗ばんだ足の匂いが漂ってくる。ガスマスクをつけても効果はなかった、強烈なおいはガスマスク貫通し、デテール人の命を奪ったのである。

「ぼうふ・・・」

コバエを追い払い少し安心した、しょうちゃん。彼女は、そのまま臭い脚を持ちあげ、ダイニングへと向かう。

「オオオイイイイイイシイイイイソオオオオオ！！」

ダイニングの上を見て「美味しそう」とつぶやく、しょうちゃん。その目線の先にはピザが乗っていた。

「軍艦の次は、街を食うつもりか？」
「街？ 街なんかどこにもないが？」
「なにぼんやりしている13号。見ろ、ピザの上を！」

ピザの上に街が転送される。その街は、デテール人は住まう近未来都市。空中バスが行きかう、未来の街がそこにあった。

「クイーンの宿した子供がねだっているんだ。街を食べたい。デテール人を食べたいってな」

デテール人のイカ目が超感覚を発揮する。
それにより、しょうちゃんの子の脳波をとらえていた。

「デテール人を食いたい。食って早くここから出たい・・・」

もじもじと動く怪物。怪物の中に怪物が入っていた。
人の体になっていない卵の白身のような存在の怪物が、そう話していた。
これがしょうちゃんの赤ちゃん。人の形になる前の赤ん坊なのである。
そんな赤ん坊も母同様、他の動物を殺すことを躊躇わない残酷な生き物だったのである。

「イタアアアアアア、ダキィイイイイイイイイイ、マアアアアアアアアス」

怪獣の咆哮が響きわかる。
その方向が引き金となって、ワームホールが開いた。
そこから現れたのは街。
浮遊大陸となって引きちぎられた複数の都市。
フリカケのように散らばった状態で都市が、ピザの上に乗せられていた。

「ホッホッホー！」

間延びした声が響く。
SEXで腹を空かせた、しょうちゃんは、ピザを見て笑った。

「あの怪獣。街を食うことに喜びを感じているのか？」

街ではなくピザを見て笑っていた。
だが、デテール人であるダイ君の目にはそう映っている。

「きゃー」
「わー」

ピザの上に乗る都市。その上には10万人のデテール人が住んでいた。
しかし1500キロの体を持つ、しょうちゃんからみれば、たったの1ミリ。
1キロの浮遊大陸は、人間の目で1ミリしかない、ごまつぶのような存在だったのである。

「うわあ、タコの足みたいなものが出て来た」

ベロンと飛び出る、ピンクの怪獣。
それはしょうちゃんの舌だった。
しかし、そんな可愛らしい女の子の舌も、デテール人からは気味の悪いものに映る。
ブツブツの生えた、臭くて汚い舌。
悪臭を放つ、気味の悪い怪獣。それ以外の何物でもなかったのである。
実際、そのピンクの怪獣は、ピザの上に乗せられた浮遊大陸をまとめて10個もぺろりと、その舌の上に乗せた。

「熱い——」
「きゃー服が焼ける」

クイーンのこと、しょうちゃんの体温はデテール人にとって耐えがたいほど高温に感じる。
そこに生える舌は、まるで火の通った鉄板のように熱せられていた。
灼熱の大地。
筋肉で固められた、熱いマグマが、都市に降り注ごうとしている。
クイーンの吐く息は臭くそして熱い。吐息と言う熱線をもろに受けた都市は、多くのビルが焼けただれていき、電柱が飴のように折れ曲がっていった。

クイーンの唾液は、マグマのように赤く燃えていた。
そして、そこに生える歯の行列は、この都市を喰らいついて、噛み砕くには充分すぎるほどの硬さを持っている。
歯の全長は短くとも8キロ以上。
歯の長さだけでも、街を作る面積を持っていた。

「フオッホッホオオオオー！！」

ピザを食べてご満悦のクイーン。
その笑顔はデテール人に悪魔の笑みとして映っていた。
罪の無い10万の市民を食し、我が子の栄養として体内に取り込んでいる。
舌の上で焼かれ、今頃は胃の中で溶かされていることだろう。
あと、数時間もすれば赤子の栄養となって、上手く活用されているのだろう。
その行動はデテール人には、あまりにもショッキングで、残酷で非人道的な行動だと映っている。
ピザの上に街を乗せ、人ごと食うなんて許しがたい悪魔的行動だったのである。

「許せねえ！ クイーンを殺してやる！！」

「おい。待て13号待て。いま行けば死ぬことになるぞ！」

宇宙船に積んであった、空中バイクを盗み、飛び出していくダイ君。
向かう先はクイーン。
10万の同胞を殺した、クイーン目掛けてバイクを走らせた。

「く・・・くせえ・・・」

人間だった頃はいい匂いだった、しょうちゃんの匂いも今では猛毒。
めまいがするほどの悪臭として感じている。だが、こんなことでダイ君は引き下がらない。
クイーンを殺すまで絶対に引き下がらない。

「しねえ！ クイーン！！」

真っ赤に見えるクイーンの後ろ姿。
その間にもピザを食し続けており、背後から迫るダイ君のことに気づいていなかった。

「くそくそ！！」

バイクに取り付けてあった機銃を使い、クイーン的首筋に打ち込む。
だが硬く熱く厚いクイーンの肌は、微動だにできなかった。

「もっと近づかなきゃダメか」

バイクをふかし、クイーンに近づくダイ君。
その時、世界のエネルギーを集結させたような膨大な熱量が正面から迫る。

「あら。なにか口に・・・」

ピザを食べ終わったわたしは、何かが口に当たった感触がありました。

「気のせいみたいね」

指で口をぬぐい、確認してみましたが、なにもついてません。

どうやら、わたしの気のせいだったみたいです。

「うふふふ。明日もダイ君といっぱいエッチしたいなー」

しょうちゃんの唇には、愛するしょうちゃんの死体があった。
彼は、しょうちゃんの可愛らしい唇に焼かれて、その短い生涯を閉じた。
クイーンが愛する、唯一のサンプルが消滅したことにより、イカ星人（デテール人）はクイーンに対する対抗手段を失うことになり、この後彼たちは急速に衰退していくことになる。